

朝堂院朝庭の調査

―第174次

1 はじめに

朝堂院は、天皇の空間である大極殿院の南に位置する回廊に囲まれた東西235m、南北320mの矩形の空間で、中央の広場（朝庭）を12棟の朝堂が取り囲むように配置される。朝堂院では、さまざまな政務や儀式が執りおこなわれた。

都城発掘調査部では、1999年以降、藤原宮中枢部の実態解明を目的に朝堂院地区の発掘調査を進めてきた。これまでに朝堂や回廊の配置と構造をあきらかにしてきた。2008年度の第153次調査以降は朝庭の整備状況や藤原宮造営過程の全容解明にむけた調査に取り組んできている。今回の調査地は、朝庭の東北部に位置する。

これまでの調査で朝庭は礫を敷きつめて整備されており、そこには儀式で使用する幢竿支柱と考えられる柱穴群や排水用の暗渠などが設けられていることが判明している。礫敷広場の下層には、藤原宮造営期の遺構（先行条坊・運河・溝・柱穴など）の存在が知られており、2011年の第169次調査では、広場の下層においてはじめてまとまった掘立柱建物を検出した。今回の調査では、朝庭東北部の土地利用のあり方を検討するとともに、その下層における遺構の具体的な状況（第153・160・163次調査の沼状遺構、第169次調査の掘立柱建物群の範囲など）をあきらかにすることを目的とした。

調査は2012年4月2日から開始し、12月17日に終了した。調査面積1,850㎡のうち、300㎡は既調査区（第163・169次調査）との重複部分である。

2 検出遺構

基本層序

調査地の基本層序は、上位から整備盛土、耕作土、床土と続き、床土の直下に藤原宮期の礫敷がある。礫敷より下位は藤原宮造営期の整地土で、これは調査区内でも厚さが異なる。調査区北辺付近では、その層厚は最大で60cmにおよび、中位付近に木屑を含むごく薄い粘土層を挟むのに対し、南辺付近では20～50cmと厚さが一定しない。後者は地山（藤原宮造営時の基盤層）の起伏に応じた

もので、全体には北方へ向けて地山が緩やかに傾斜し、その分整地土が厚くなっている。地山の標高は、調査区の東南隅で72.0m、東北隅で71.3mで、約70cmの比高がある。また、調査区北辺付近の断割調査等で確認した沼状遺構SX10820は、下部が精良な粘土で埋まったのち、上記の整地土で埋め立てられており、その厚さは最大で80cmにおよぶ。

宮造営期の整地土は、色調が褐色（10YR 3/4暗褐色）を帯び、白色鉱物粒、炭粒、粘土ブロックなどを多く含み、ところにより木屑・炭化物層や薄い砂層を挟んでいる。土器や瓦の出土も多い。ことに調査区北辺では、薄い木屑層を指標に上部・下部への細分が可能である。この土層は、これまでの調査で第二次整地土と呼んできたものと同一である。なお、第二次整地土と礫敷との間に橙色系の土層や砂を挟むところがあり、この土層は第163次調査の「橙褐色の整地」土、ないしは「最終的な整地」土（『紀要 2011』）であるとみられる。このほか、第一次整地土を調査区中央の南北断割などで確認している。

藤原宮造営前の遺構

第174次調査では、礫敷上面を精査したのち、南側の東西畦より南側で礫敷を除去し、宮造営期およびそれ以前の遺構を調査した。また、沼状遺構SX10820の南端を確認するために、南北畦の西側で幅3mにわたり礫敷を除去し、第二次整地土を順次掘り下げてSX10820を確認した（図108）。

斜行溝SD11110 調査区南壁および調査区南半部東壁の土層断面のみで検出した（図109）。調査区南壁の溝は、マンガン斑を含む褐色で粘性の強い地山を掘り込んで形成されており、溝幅は8.3m、深さは1m以上あるが、湧水が激しいため底部は確認できなかった。埋土は均質な暗青灰色のシルト層で、飛鳥Ⅰとみられる須恵器片や杓子状木製品が出土した。溝上層の両端には黒褐色のシルトに粗砂を多く含む層が確認され、さらに藤原宮造営にともなう整地土によって埋め立てられる状況が観察できる。溝はしばらく湛水状態にあり、大半が埋没した後、水が流れる状態があり、最後に整地により埋め立てられるという状況が復元できる。

斜行溝SD10963 第169次で検出した斜行溝で、今回の調査では旧調査区東壁で再確認した。古流向は南西から北東で、堆積土は砂ないしはシルトである。北壁では

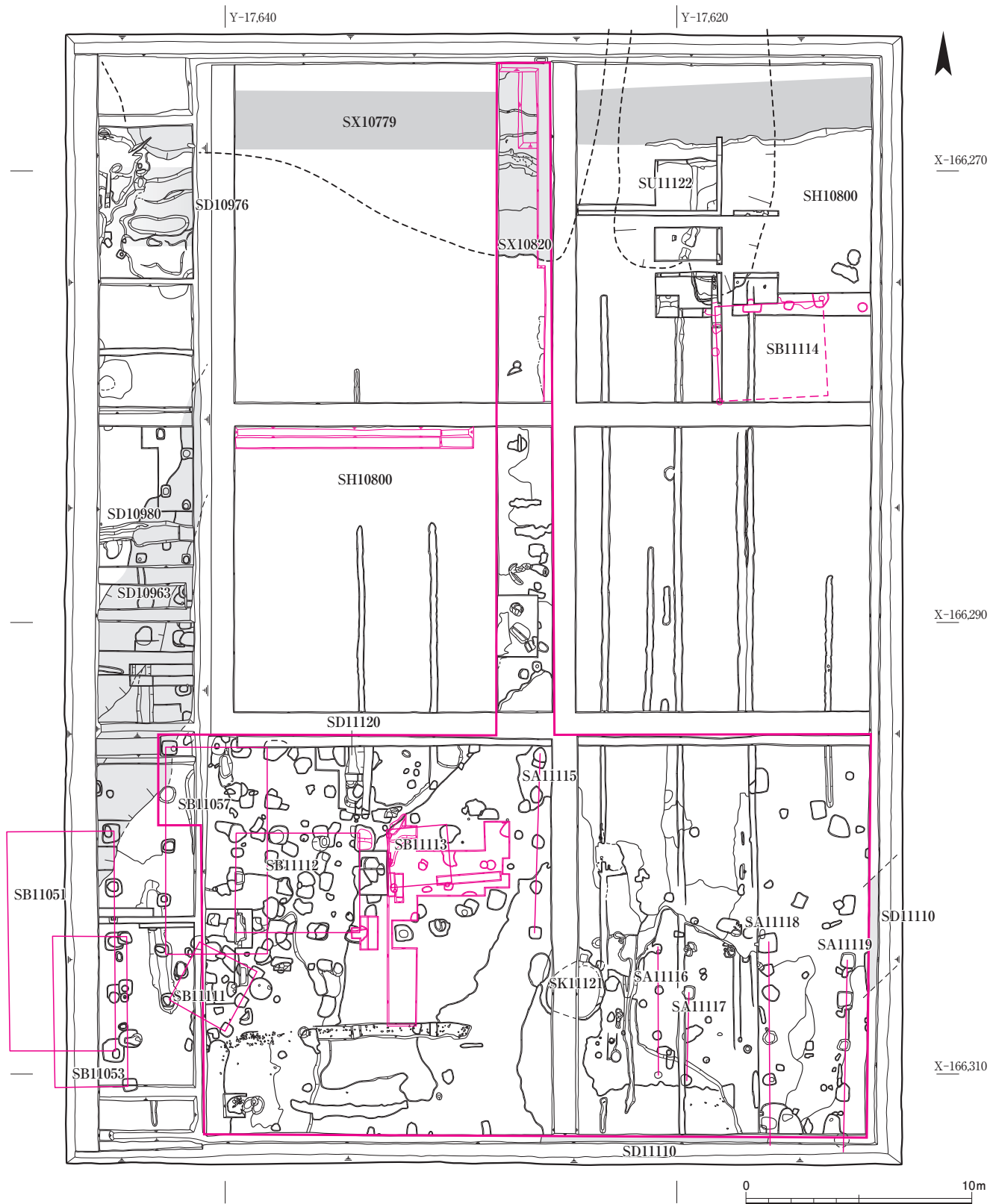


図108 第174次調査遺構図 1:250

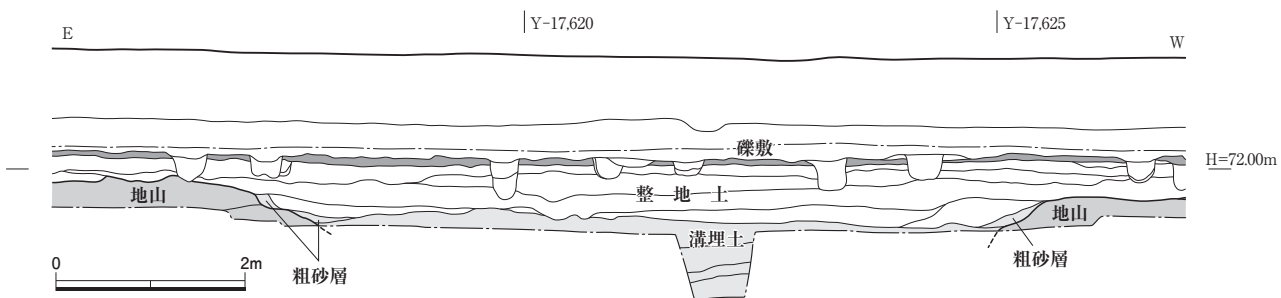


図109 斜行溝SD11110断面図 1:80



図110 礎敷下位の掘立柱建物群（東から）

この溝の続きを確認できず、層位的に上位の沼状遺構 SX10820によって削平を受けたものとみられる。

藤原宮造営期の遺構

建物SB11111 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物で、南北の柱筋は東に大きく振れている。柱穴は径0.5mほどで不整形を呈する。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.5m（5尺）である。この建物は地山面で検出しており、方位も東に大きく振れていることから、藤原宮造営以前のものである可能性もある。

建物SB11112 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物で、柱穴は径0.7～1mほどの不整形で、検出面からの柱穴の深さは40～60cmほどで、柱間寸法は桁行が1.9m（6.5尺）、梁行きは2.1m（7尺）である。

建物SB11057 第169次調査では西の側柱列を検出しており、今回の調査で建物の全貌があきらかになった。桁行4間、梁行2間の掘立柱建物である。柱穴は径0.6～1mほどの不整形で、検出面からの柱穴の深さは70cmほどあり、柱間寸法は2.4m（8尺）である。

建物SB11113 SB11111の東に近接する1間四方の掘立柱建物である。柱間寸法は2.4m（8尺）で、南西隅の柱穴には径10cmの柱根が残存する（図4）。

建物SB11114 木屑溜りSU11122のすぐ南側で検出した柱穴を北西隅とする、桁行3間、梁行2間の掘立柱建物。北西隅の柱穴には柱根が残る。この柱より南側の柱穴2基は、いずれも木屑溜りの断割調査の過程で、断割の東

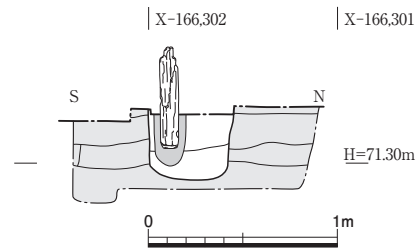


図111 建物SB11113柱穴断面図 1:40

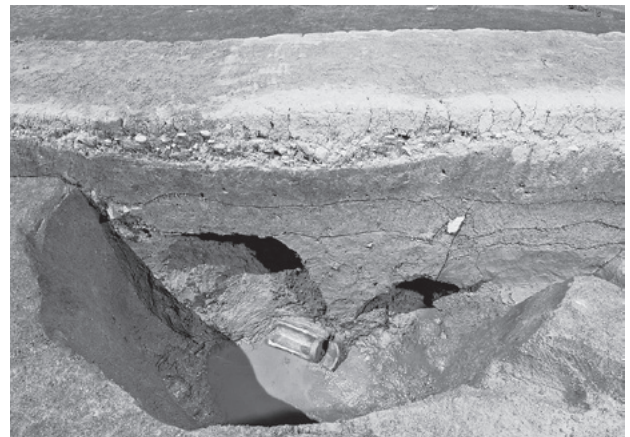


図112 土坑SK11121（東から）

西両壁で確認したものである。また、北側柱は北西隅の柱穴を含め4基を検出した。建物は北でやや西偏する。

柱列SA11115 南北に並ぶ柱穴を5基検出した。柱穴は径0.5～0.7mの不整形で、柱間寸法は北端の1間が1.8m（6尺）で、残りの3間は2.1m（7尺）である。

柱列SA11116 南北に並ぶ柱穴を4基検出した。柱穴は径0.3～0.4mの円形を呈し、柱間寸法は1.8m（6尺）である。

柱列SA11117 南北に並ぶ柱穴を3基検出した。柱穴は径0.3～0.4mの不整形を呈し、柱間寸法は1.8m（6尺）である。南でやや西に振れている。

柱列SA11118 南北に並ぶ柱穴を5基検出した。柱穴は径0.5～0.7mの不整形で、柱間寸法は1.8m（6尺）である。柱列は南の調査区外に続く可能性がある。

柱列SA11119 南北に並ぶ柱穴を5基検出した。柱穴は径0.5～0.8mの不整形で、柱間寸法は南の3間が2.1m（7尺）、北の1間が1.8m（6尺）である。SA11118とは方位の振れが揃わない。この遺構は調査区の南あるいは東へ続く可能性がある。

南北溝SD11120 幅0.8mほどの南北方向の素掘り溝で、検出面からの深さは20cmほどである。溝の南端は確認したが、北端は未確認である。土器が多く出土した。

土坑SK11121 直径2.6mの円形を呈し、深さは1.2mである。第二次整地土中から掘り込み、さらに地山の灰色粗砂層を掘り抜いているため湧水が激しい。埋土は暗青灰

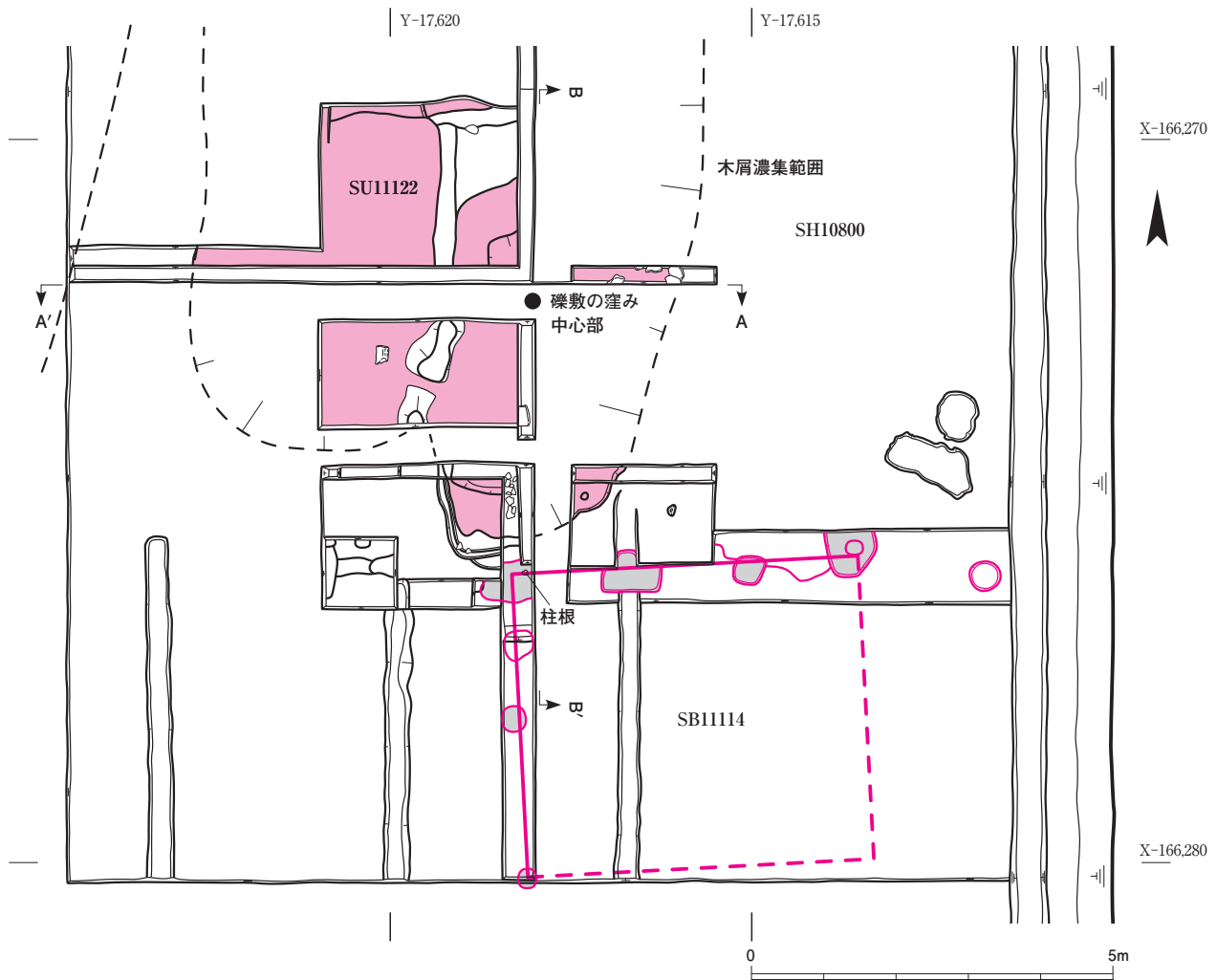


図113 木屑溜りSU11122 1 : 100

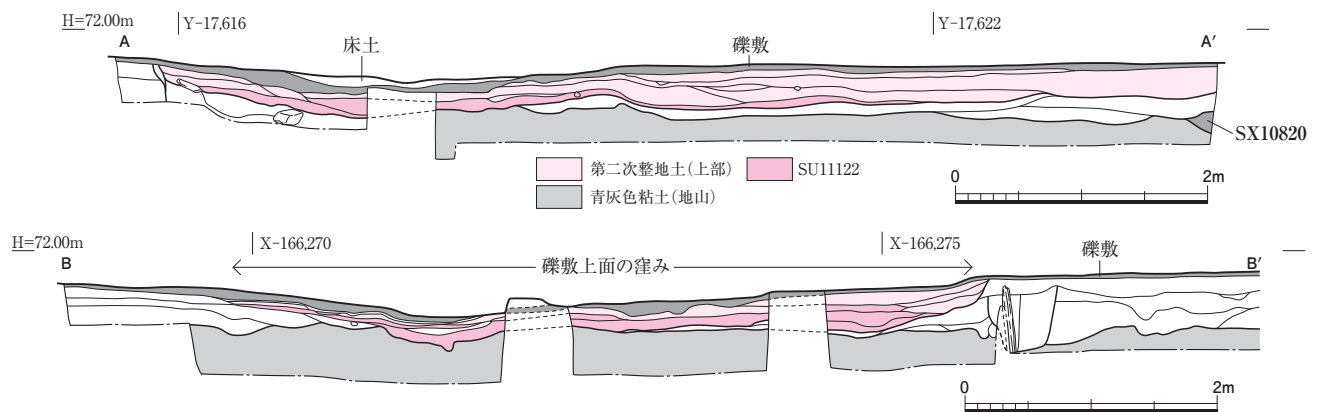


図114 木屑溜りSU11122断面図 1 : 60

色の粘質土で、土器のほか、藤原宮式の軒丸瓦6281Bがほぼ完形で出土した(図112)。

東西溝SD10980 第163次調査区の旧東壁で検出した素掘り溝。斜行溝SD10963の埋土を掘り込んでおり、第二次整地土に覆われる。調査区中央の南北断割と、北から一つ目の東西アゼに沿う東西断割ではこの溝を確認できなかったため、第169次調査の旧東壁よりは東へ延びるものの、途中で途切れている可能性が高い。

東西溝SD10976 第163次で検出した素掘溝で、西排水溝の東壁面で再確認した。幅約6.5mで、第二次整地土で埋まっている。この溝は南肩がやや不明瞭で、整地土の

違いである可能性も残る。

木屑溜りSU11122 第二次整地土の中には木屑を含む薄い土層があり、調査区の北側、沼状遺構SX10820とほぼ重複する範囲に広く分布している。そのなかで特に木屑が密集した部分が調査区東北部にある(図113)。それは礎敷上面の窪み(南北約6m、東西約3m)の下層にあたる。この窪みの性格究明のため、その西半分で断割調査をおこなったところ、礎敷の下位に1層を挟み、その下に木屑が堆積している状況を確認した。この範囲における木屑は、南端から東端にかけては土坑状の窪みの中に堆積した様子を示すが、北から西へかけては土坑のプランを

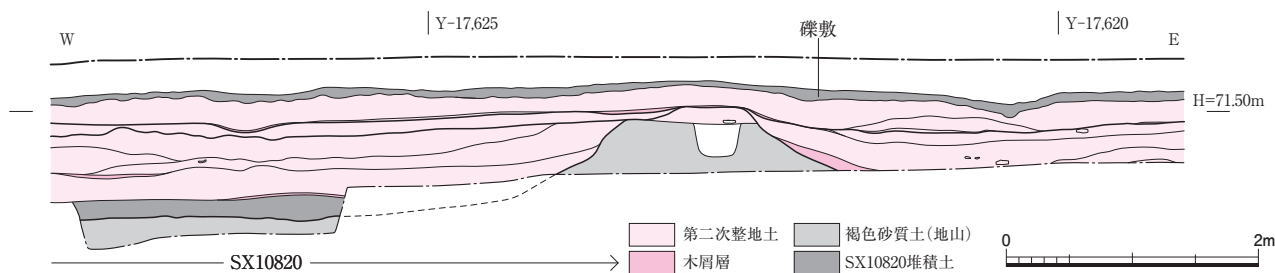


図115 調査区北壁土層図 1:60



図116 沼状遺構SX10820断面(北西から)

検出できず、とくに西へは木屑層が厚さを減じてゆく(図114)。また、北へは断割の範囲を超えてさらに延びるものとみられ、調査区北壁・Y-17,617からY-17,622付近に現れた落ち込み(木屑層を挟む)へと続く可能性がある(図115)。いずれにせよ、木屑溜りSU11122の層準は、第二次整地土の中位に挟まれる木屑薄層に一致するものとみられ、朝堂院の造成中に木屑が投棄されたことを示している。

SU11122を調査する端緒となった礫敷の窪みは、木屑の腐食・圧密によって生じたものとみられ、この窪みの中央付近で木屑がもっとも厚い。出土した多量の木屑は整理箱で180箱におよび、加工具による切削痕跡などをとどめている。この木屑は、宮造営時の木材加工で生じた削り屑であるとみられる。

沼状遺構SX10820 朝堂院東北隅に掘削された窪地である。第一次整地土を掘り込んでおり、第二次整地土によって埋め立てられている。この窪地は第160次調査でその北端を、第153・163次調査でその西端を検出しており、今回の調査ではその南端を確認した。調査区の中央で南北方向に断割調査をおこなったところ、SX10820の南端はX-166,274付近と判明した。これにより、SX10820の南北長は約50mとなる。しかしその汀線は、この断割のすぐ東側でほぼ北折し、そのまま北へ延び、調査区北壁(Y-17,623付近)で確認した(図115)。現在のところ、礫敷より下位の本遺構は部分的に検出したのみ

で、正確なプランは判明していないが、ところによってはその汀線が入り組んでいた可能性がある。

調査区北壁では、SX10820の深さは70cmであるが、これより北側(未調査)に向かいさらに深くなるものと思われる。断割調査によれば、SX10820はまず青灰色粘土によって15~20cmほど埋まり、その後一気に埋め立てられている(図116)。青灰色粘土は自然堆積とみられ、木屑層を挟むが、それ以外は土器をわずかに含むのみである。これより上位の埋立土は、グライ化による色調変化を除けば第二次整地土と同じで、土器、瓦、木屑のほか、モモ核、木製の櫛などが出土した。

炭溜り 上述の遺構のほか、整地土中では木炭片が集中する窪みを複数箇所で見出した。これらの炭溜りからは、木炭片とともに燃えさし、植物遺体、土器が出土している。

藤原宮期の遺構

広場SH10800 今回の調査区全域で検出した。整地土上に礫を敷きつめて整備している。礫敷層の上面は、調査区の東南隅が標高72.2mでもっとも高いのに対し、北辺部は71.6~71.7mと低く、北側へと緩やかに傾斜している。礫を敷きつめて整備された広場で、礫敷層の厚さは3~10cmほどあり、遺存状況が悪い部分では下位の整地土が露出していた。また、調査区の東北部では南北約6m、東西約3mの範囲が不整形にくぼんでおり、この部分の礫敷がもっとも低い(図117)。前述のように、この窪みの下層では木屑溜りSU11122を確認した。なお、礫敷の上面では藤原宮期の遺構は他に確認されなかった。

(今井晃樹・森川 実)

礫敷に使用している砂礫の構成を数値化するために、5ヵ所でサンプリングを実施し、粒径ごとの重量測定と礫種の同定を実施した。3ヵ所は0.5m四方、2ヵ所は1m四方の区画で礫敷層を採取し、水洗篩別・気乾後、粒径ごとの重量を測定した。篩別は0.5mm以上を対象とし、長径40mm以上については、公文・立石(1998)に従い、粒径(長径・中間径・短径)、重量、円磨度、礫種を記録した。

粒径ごとの重量は、0.5~1mm(粗粒砂)が12.3kg、1~2mm(極粗粒砂)が13.9kg、2~4mm(細礫)が9.9kg、4mm(中礫)以上が68.1kgであった。また、中礫以上のうち長径40mm以上の礫は44.4kg(534個)である。以上か



図117 礫敷上面の窪み（北東から）



図119 通路状遺構SX10779（東から）

ら、それぞれの重量比は粗粒砂12%、極粗粒砂13%、細礫10%、中礫以上65%となる。

図118には長径40mm以上の礫の長径および礫種を重量比で示す。粒径は、長径70mm未満のものが55%と過半を占め、最大のものは142mm（花崗片麻岩）であった。また、60～70mmと100～110mmに弱いピークが見られる。礫種は、閃緑岩が64%でもっとも多く、ついで花崗片麻岩18%、花崗岩10%、斑礫岩5%の順であった。そのほか土器片などが2%を占める。それぞれの階級でも、120mm以上を除き閃緑岩が半分以上と多くを占める傾向は変わらない。

（今井・星野安治）

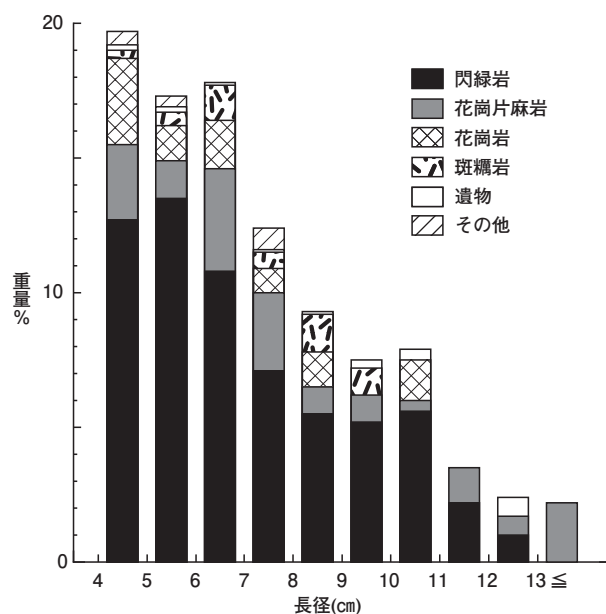


図118 礫敷の粒径分布

宮廃絶後の遺構

通路状遺構SX10779 調査区北端で検出した東西にのびる低い土手状の高まりで、広場SH10800の上に藤原宮期の瓦や土砂を盛り上げて造成している（図119）。幅は2～3mあり、東西28m分を検出したが、東は調査区外へつづく。第153・163次調査で検出したものと一連の遺構である。朝堂院東第六堂（第136次）の調査では、朝堂院廃絶後の基壇上に平安時代の屋敷地が形成され、基壇周囲には本遺構と同様の通路状遺構SX10211・10212・10215・10216を確認している。これらは屋敷地をつなぐ通路と考えられるが、本遺構もこれらと同様の通路とみられる。

（今井・森川）

3 出土遺物

瓦 磚 類

本調査で出土した瓦は軒丸瓦57点、軒平瓦51点、面戸瓦19点、熨斗瓦7点、ヘラ描き丸瓦2点、ヘラ描き平瓦11点、丸瓦170Kg、平瓦648kgである。

第二次整地土からは6275型式1点、6279Ab1点、6642A2点、6646A1点が出土した。これらは朝堂院回廊所用の型式である。木屑溜りSU11122からは6561Aが2点出土している。土坑SK11121からは軒丸瓦、面戸瓦、ヘラ描き丸瓦が出土した（図120）。軒丸瓦は6275Aが3点、6279Aaが1点、6279Abが1点、6281Aが1点、6281Bが2点である。これらはいずれも朝堂および朝堂院回廊所用の型式である。6275Aは範傷の少ない第1段階で胎土に砂粒を多く含むNグループのものと、クサリ礫を含む高台・峰寺産のもの、外縁頂部を面取りする第2段階の資料とがある。6281Bの2点は接合粘土が多く、指ナデツケの痕跡が残るⅡグループに属する。



図120 土坑SK11121出土瓦

面戸瓦は、全長が43cm、舌基部の長さは29cmほど、舌端部の長さは18cmほどもある大型品である。凸面は縦位の縄タタキ後に横方向のハケメ調整をおこない、凹面側縁にのみ面取りを施す。左右対称形と考えると、復元の全長は50cm以上になる。隅棟用であれば、欠損する袖部の一方は短かい可能性もある。類例は朝堂院東第一堂および朝堂院回廊東北隅（第107次調査）、朝堂院東第四堂（第144次調査）、本薬師寺（1994-2次調査）にある。（今井）

土 器

本調査では、整理箱で62箱の土師器・須恵器・埴輪が出土した（図121・122）。その大部分は、礫敷より下位の第二次整地土から出土したもので、これら以外に沼状遺構SX10820および木屑溜りSU11122から出土したものがある。第二次整地土は上位より「灰色土」、「茶色土」、「茶灰土」などと細分して掘り下げたが、土器はこれらの「層位」を超えて頻繁に接合し、また整地土中に挟まれる炭溜りや、整地土の掘り下げ中に検出した土坑などから出土した土器とも接合する。SX10820では、埋立土と堆積土との両方から土器が出土している。以下、第二次整地土から出土した土器と、SX10820出土土器（20～25・40・53・60・84・96）とについて述べる。

土師器は杯A（1～5）、杯B（6）、杯C（8～25）、杯G（31～39）、杯H（40～43）、皿A（26～29）、皿B（30）、鉢（45）、鉢H（44）、甕（46～51）、鍋（52）、竈、ロクロ土師器の杯蓋（7）がある。杯A・杯Bはいずれも内面に二段斜放射暗文を施す。2は内面に漆膜が残る。杯Cは、第二次整地土出土の杯CⅠ（14～19）、杯CⅡ（13）、杯CⅢ

（8～12）がa手法で調整し、器高の低いもの（15～19）がみられるのに対し、SX10820出土のもの（20～25）には口径・器高ともに前者を上回る個体があり、ことに杯CⅠ（23～25）の調整手法はb1手法で古相を呈する。皿Aは、a手法で一段斜放射暗文をもつもの（27～29）が多いが、26が底部外面にハケメを残し、無暗文でやや特殊である。皿B（30）は内面に二段斜放射暗文を施す。杯G（31～39）は口径11～13cmで、口縁部形態は多様である。33は内面にハケメを残す。杯H（40～43）と鉢H（44）は底部外面をヘラケズリで整えたもので、口縁部はやや外反する。40がSX10820出土、これ以外は第二次整地土出土である。鉢（45）はb1手法で調整し、内面にはアバタ状の潰痕が密集しており暗文は確認できない。甕は口径25cmを超える大型品（46・47）と、口径12～15cm程度の小型品（48～51）とからなる。48は内外面に付着物が残る。鍋は図示したもの（52）のほかに数個体がある。

須恵器は杯H（59・60）と杯H蓋（53～58）、杯G（67～72）と杯G蓋（61～66）、杯A（76～83）、杯B（91～98）と杯B蓋（85～90）、椀A（84）、皿A（73）、平瓶（75）、壺蓋（74）、壺A（99）、甕（100）がある。杯Hは身・蓋ともに口径が9～10cmで、蓋の頂部はやや丸みを帯びる。杯身・杯蓋ともに外面をヘラケズリで整えるものは少ない。杯Gは口径が9cm未満から10cm台までであり、底部にヘラ切り痕を残す。72は内面に漆膜が残る。杯G蓋は受け部の直径が約9cmで、杯身の口径とはほぼ一致する。笠形の頂部にはロクロケズリを施し、宝珠形のつまみを付す。このうち、63はSX10820堆積土のさらに下位（青灰色粘土上部）から出土したものである。杯Aは口径10～13cmで、底部にヘラ切り痕を残す。杯Bは口径12～15cmで、外方へと踏ん張る高台を付したものが多い。79は灯明器である。杯B蓋も受け部の直径が10～14cmで、杯Bとは口径がある程度一致する。杯B蓋の頂部は笠形だが低平なものもある。87は転用硯である。

以上の土器は、沼状遺構SX10820出土の土師器杯C（20～25）や、第二次整地土出土の須恵器杯G（61～72）・杯H（53～60）など、飛鳥Ⅰ～Ⅲに属するものと、宮造営期の土器（飛鳥Ⅳ）とが混在しているものとみられる。第二次整地土出土土器については、古相の土器の由来に関して不明な点があるため、さらなる類例の追加を待ちたい。（森川）

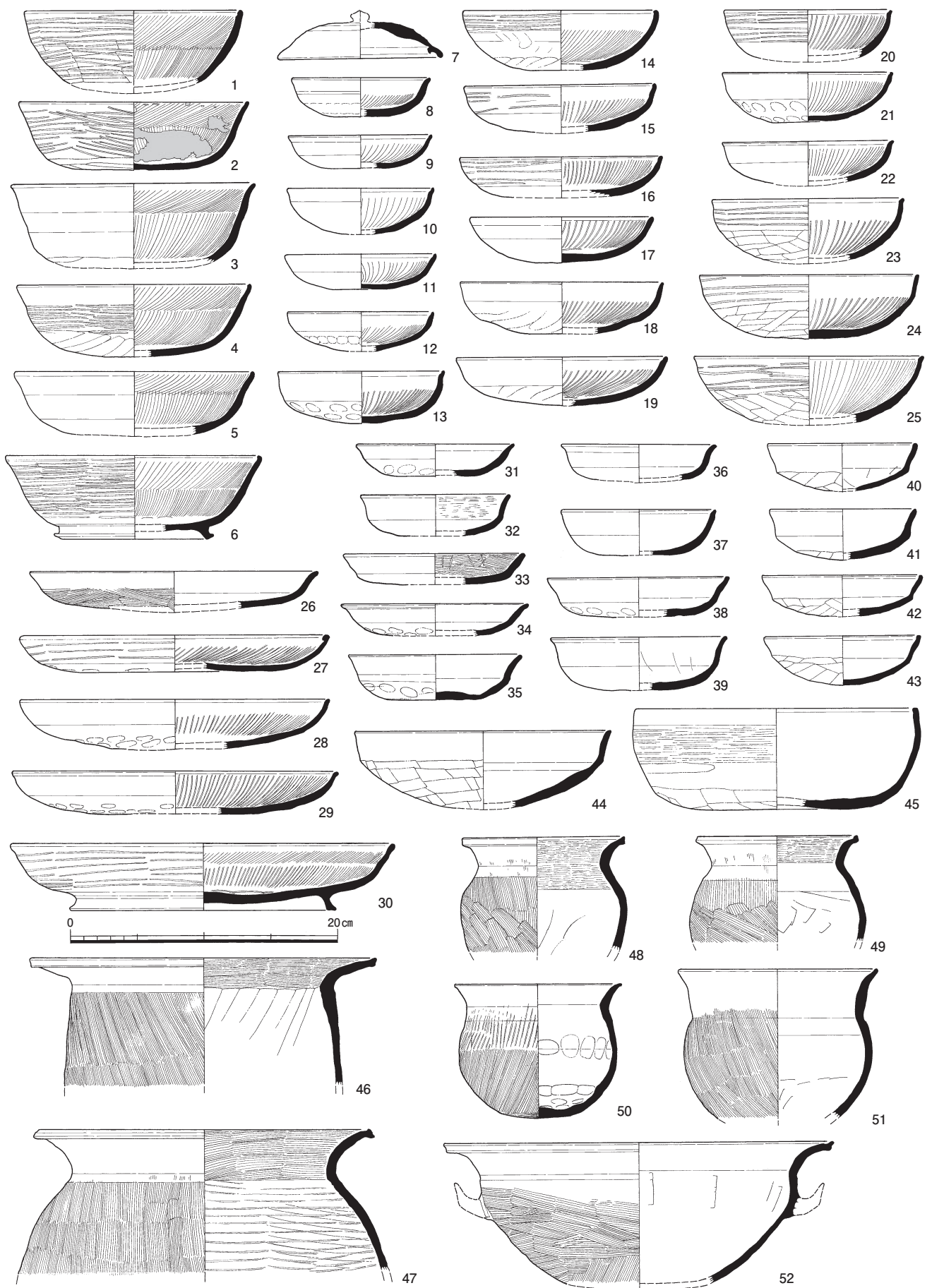


図121 第174次調査出土土器 (1) 1 : 4

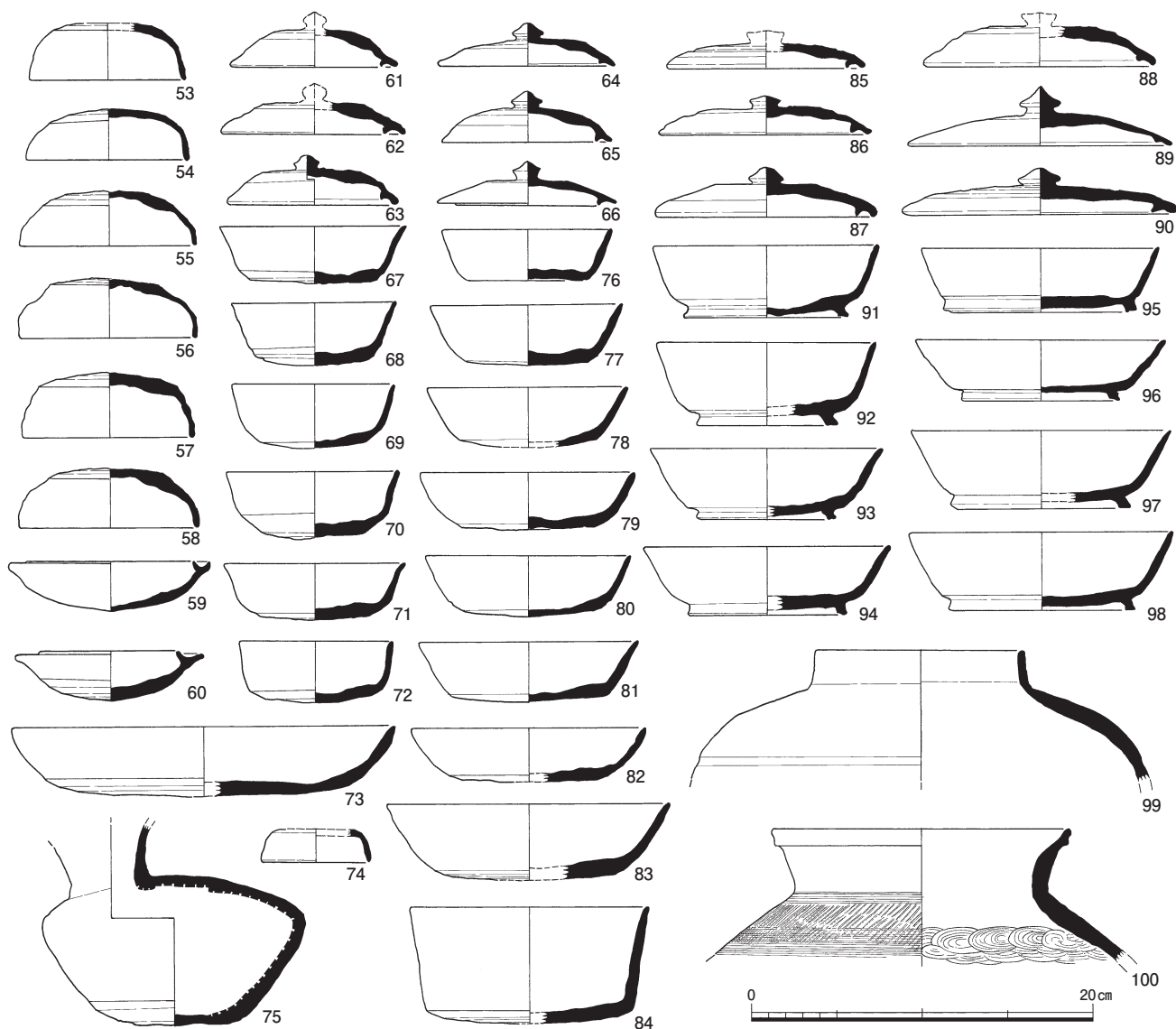


図122 第174次調査出土土器(2) 1:4

木製品・石製品等

木製品類 製品・燃えさし・雑木・木屑などが整理箱29箱分出土した。雑木や燃えさし、木屑は多量に出土したが、木製品の出土はわずか4点に留まった。木屑については加工痕跡が明瞭で使用工具の識別が可能と思われるものが多数存在する。なお、木製品の樹種同定は藤井による。

杓子状木製品(図123-1)は斜行溝SD11110から出土した。残存長36.4cm、幅7.4cm、厚さ1.3cmで、柄の中央部に孔をもつ。木取りは追柁目である。樹種はコウヤマキ。櫛(図123-2)は3つの破片からなるが、完形には復元できない。残存長6.5cm、残存幅4.8cm、厚さ1.4cm。樹種はカナメモチである。不明木製品(図123-3)はSB11112の柱穴から半破した状態で出土した。直径8.1cm、厚さ1.0cm。放射状にのびる穴が側面の4カ所で確認されるが、内部にはもともと刺さっていたと考えられる有機物が残っており、穴の深さは不明である。衣笠の可能性が考えられる。樹種はスギ、木取りは柁目である。琴柱(図

123-4)は整地土中の炭溜りから出土した完形品で、長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm。樹種は未同定である。

(庄田慎矢・藤井裕之／客員研究員)

石製品 合計12点出土した。紡錘車(図123-5)は整地土出土の完形品で、直径4.5cm、厚さ1.6cm、重さ42gである。上端部の角には敲打痕が部分的に残る。砥石(図123-6)は整地土中の炭溜りからの出土である。貫通孔を持ち、長さ5.5cm、幅3.3cm、厚さ3.0cm、重さ74.5g。長辺側4面をすべて使用し、うち2面は溝状に凹む。携帯用の砥石と考えられる。この他砥石片が整地土から2点出土している。管玉(図123-7)は広場SH10800からの出土で、長さ2.2cm、径0.7cm。碧玉製で両面穿孔である。顕微鏡観察で表面に赤い付着物が確認されたが、これに対する蛍光X線分析により、付着物は水銀朱と判断された。よって、古墳の主体部に副葬されていたものが何らかの原因で紛れ込んだものと推定される。この他、石製白玉も整地土中の炭溜りから1点出土した。

(庄田・降幡順子)

壁土・焼土 整地土などから小片が7点出土した。

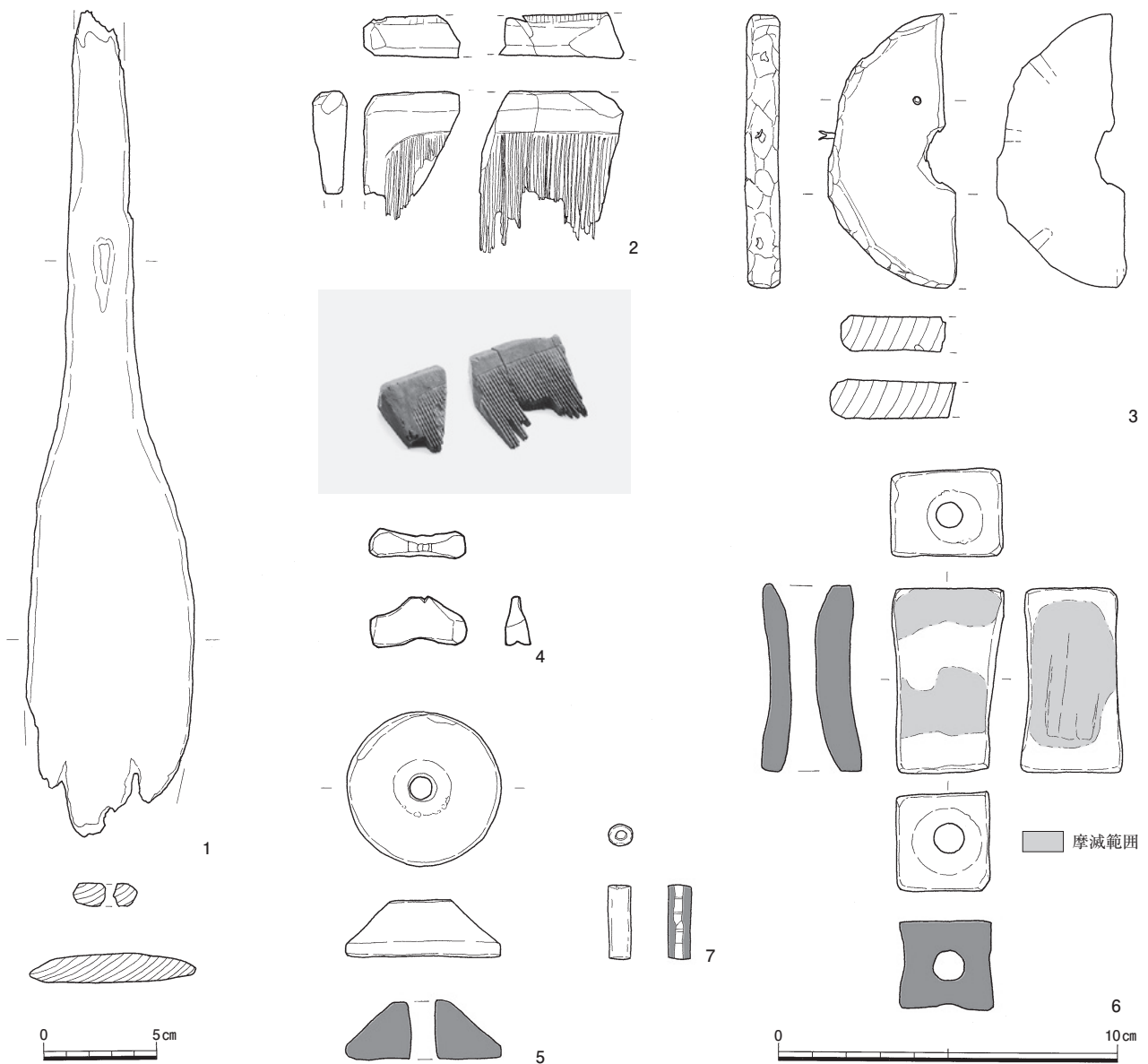


図123 第174次調査出土木製品・石製品 1:2 (1のみ1:3)

種実類 整理箱4箱分が出土した。特にモモ核は層位を問わず出土し、非常に数が多い。その他、整地土中の炭溜りからはイネ、オオムギなど、木屑溜りSU11122・沼状遺構SX10820からはヒョウタン、ウリなどの種子が多数出土した。

動物骨 整地土および床土からウマないしウシの歯牙が11点出土したが、いずれも小片である。 (庄田)

昆虫遺体 最小3個体分が出土した。SK11121の土層断面を記録中に、遺構最下部の粘質土層が崩落したブロック内に光沢のある黒い物体が見られたため、周囲の土ごと取り上げた。室内で、土塊表面に表れている昆虫遺体をピンセットを用いて剥ぎ取った後、ピンセットで土塊を割りながら、露出した昆虫遺体を摘み取った。さらに残った土塊を水に溶き、泡沫フローテーション法(起泡剤:ドデシル硫酸ナトリウム)により昆虫遺体を検出した。種の特定は実態顕微鏡(オリンパスSM61)を用いて鏡下

で検出した昆虫遺体の部位を特定した上で、現生種標本および図説と照合し種を特定した。その結果、最小個体数でゲンゴロウ1個体(図125)、クロゲンゴロウ2個体を検出した。詳しい同定結果は表23のとおりである。なお、部位名については、ゲンゴロウ・クロゲンゴロウともに図124を参照のこと。

上記2種以外の昆虫遺体は未検出である。また、ゲンゴロウの各遺体片が同一個体に由来する場合、中脚爪の形状などからこの個体はオスの可能性が高い(クロゲンゴロウの雌雄は不明)。

これらの遺体は、かなりの部位が残っていること、押しつぶされている状態で表面のキチン質だけが遺存していること、ゲンゴロウが土に潜る性質がないこと、榎原市ではここ20年ゲンゴロウの棲息が確認されていないことなどから、コンタミネーションによる可能性は低いと思われる。

表23 第174次調査出土昆虫遺体同定結果

検出種:ゲンゴロウ <i>Cybister japonicus</i>	
最少個体数:1個体	
検出部位	数量
前胸背板	1
小楯板	1
中胸腹板	1
上翅	左右各1
中腿節	左1
中跗節 右1~5節	各1(爪2)
後胸腹板	1
後基節	左右各1
後転節	左右各1
後腿節	左右各1
後脛節	左1
端刺	内・外 各1
後跗節 左1~5節	各1(爪1)
遊泳毛(後脚+中脚)	20+
腹部腹板 1~6節	各1

検出種:クロゲンゴロウ <i>Cybister brevis</i>	
最少個体数:2個体	
検出部位	数量
前胸背板	1
上翅	左右各2
後胸腹板	1
腹部腹板 2~3節	各1

ゲンゴロウは成虫で越冬するので、遺構が埋没した季節性は特に示さない。しかし、ゲンゴロウは天敵を避けるために水底に身を隠すことがあり、滞水域、特に冬などは湧水のあるところにいる傾向がある。これらのことから、出土遺構であるSK11121は、当時水溜り状であり、ゲンゴロウが好む有機物などが存在していた可能性が考えられる。

(木村史明／榎原市昆虫館・庄田)

4 ま と め

本調査の成果をまとめると次のとおりとなる。

礫敷広場を検出 これまでの調査成果と同様に、朝堂院朝庭が最終的に礫を敷きつめて整備されている状況を確認した。今回の調査区では、朝庭中央部で確認された石詰暗渠などは設けられておらず、藤原宮期の遺構は他に確認されなかった。

藤原宮造営期の様相を解明 第169次調査では調査区東南部で藤原宮造営期の掘立柱建物を7棟検出している。これらの建物は①第一次整地土上面あるいは地山上面（宮造営以前）、②第二次整地土下層、③第二次整地土上層の3時期に分けることができる。

今回調査した3棟の掘立柱建物は、第169次で検出した建物と一群となる。SB11111は①の時期に、SB11057

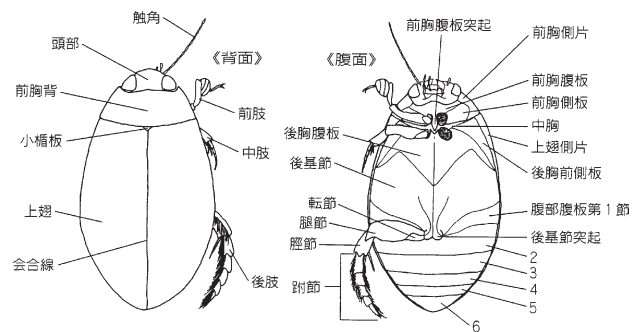


図124 ゲンゴロウの各部名称（森・北山1993より転載）



図125 SK11121出土ゲンゴロウ遺体

は第169次の成果から②の時期、SB11112はSB11057と重複するため③の時期と考えられる。この建物群の東には南北方向の柱列が並ぶ状況もあきらかになった。

木屑溜りと沼状遺構 礫敷より下位の第二次整地土中には、多量の木屑が部分的に厚く堆積していることが判明した。その木屑は藤原宮造営時の木材加工で生じたもので、木屑の廃棄と宮の造成が同時に進行していたことを示す。同様の木屑は、朝堂院東面回廊東側の南北溝SD9040（第107次、『紀要 2001』）や東第二堂付近（SD9690、第120次、『紀要 2003』）でも出土している。また、朝堂院の東北部で確認してきた沼状遺構は、今回の調査でその南端を確認し、それが第二次整地土で埋め立てられていることを追認した。

(今井・森川)

参考文献

- 公文富士夫・立石雅昭『新版 碎屑物の研究法』地学団体研究会、1998
- 森正人・北山昭『図説 日本のゲンゴロウ』文一総合出版、1993